

— 告 白 —

KIT
キャンパス
レポート
文・杉村裕之



平林 有翔 (ひらばやし ゆうと)
金沢工業大学
工学部
電気電子工学科四年
長野県立大町岳陽高等学校出身

瞳に感じた安曇野の春光 Uターン就職で親孝行を

ふると安曇野の自然のように澄んだ瞳だ。しかし、厳しい冬のそれではない。少々、立ち入った質問にも嫌な顔ひとつせず答える誠実さ。さらに、「早く楽をさせてあげたい」といたわる両親への愛情。取材者として、やわらかな春の光を感じるのである。

就活を地元の製造業に絞ったのも親孝行をとの思いからだ。長野

県有数の電気メーカーから内々定をもらい、「製造技術の現場で生産性を高める提案や改善に携わり、目に見える形にしたい」と話す。

そもそも、KITを選んだ動機のひとつが、進路指導の教諭から聞いた「就職に力を入れ面倒見のいい大学」だった。もうひとつは、勉強の習慣をしっかり身につけるという自らに課した宿題だ。中学、

高校と部活動の卓球に熱中し、勉強をおざなりにした後悔と反省があった。

「KITでは、レポートなどの提出物が多く、習慣化の基礎ができました」。その成果は、三次次に受けた電験三種（第三種電気主任技術者）合格につながっていると、今年はより難度の高い二種に挑戦するそうだ。

現在、泉井良夫研究室で、水を再生可能エネルギーで電気分解し生成した水素を、電動小型モビリティの燃料電池に活用する研究に取り組む。従来、蓄電池型の課題だった充電時間の短縮、稼働の長時間化、馬力の向上を可能にする大きなメリットがある。また、ガスボンベと異なり、水素を貯蔵するキャニスター（金属容器）が安全で運搬も容易なことから、災害時のポータブル電源としても有望視されている。

「再生可能エネルギーの地産地

消をテーマにしてきた私の研究室で、今回のようなハード主体の研究は初めてです。不安も大きかったですが、朝から夜まで計測で頑張っています」。八月下旬に開かれる電気学会で、平林さんが発表デビューするのも、泉井先生の厚い信頼の表れに違いない。

勉強の息抜きにと、子どもの頃、母から手ほどきを受けたピアノを再開して二年あまりがたつ。一番好きという、カッチーニの『アヴェ・マリア』を試聴してみた。何と静かで深い曲であらう。闇が標（はなだ）色を帯び、明けそめていく空と、希望の二文字が浮かんだ。

来年、卒業してUターンする頃には、この佳曲を弾きこなしているかもしれない。若葉が燃え、雪解水が光る安曇野の春は、彼の帰郷を待ってやって来る。

金沢工業大学

石川県野々市市扇が丘七一
電話番号〇七六二四八二〇〇